

論文

日本の図書館組織における専門職団体としての矜持と溶解（後編）

志保田 務

(桃山学院大学名誉教授)

Formation of Japan Library Association and the Other society as Professional Societies and Their Dissolution: Part Two

By Tsutomu SHIHOTA

(Emeritus Professor of St. Andrew's University)

抄録

(承前) 日本の図書館関係団体における専門職たる意識，専門職団体の矜持の形成について，その発生，以後の内実の進展，変容を的に批判的に検証する。

前後編に分け，前編（先稿）では，日本文庫協会その他わが国図書館関係団体の誕生と，そこにおける専門職団体としての規則化，初期の活動について検討した。日本文庫協会は 1892（明治 24）年に設立，16 年後の 1908（明治 41）年，日本図書館協会と改称する（英語名は当二者共 Japan Library Association : JLA）。

JLA は設立以降，わが国図書館界において制度化，標準化，協力を実現し，職業としての安定化を図り，同界への国家による財政，立法上の実動を引き出そうとした。本稿はこうした営為を，斯界における，矜持と表現する。ただ国家権力は，図書館界のこうした運動の奨励を装いつつ，実際はこれを利用して思想誘導の手先となろうとした。こうした流れのなか，JLA は国家権力への接近を強めた。昭和初期には図書館専門（職）団体としての矜持全面に曇りが浮き彫りとなる。

後編（当稿）では，いわゆる十五年戦争時期（昭和初期から同 20 年まで）における JLA の図書館専門団体としての矜持の変質と，後発の図書館研究団体，青年図書館員聯盟が示した毅然たる立ち位置を対比，論究する。そして終戦直前期における図書館団体の崩壊について実質面を含め検討する。最後に戦後期にも僅かに言及し，戦中期の逝き方の断絶，あるいはその継承，さらには転生を考察し，現代への繋がりを質す。

なお，引用に関しては，著者名・文献刊行の年月を以って文末の引用文献（リスト）へ繋いでいる。一部に当該事項に関する関係資料上の所載ページを「p. ○○」として付記した。

Abstract

Nihon Bunko Kyokai was formed as a professional society in the Meiji era, and its name was changed into Nihon Toshokan Kyokai (Japan Library Association: JLA) in the Taisho era. This paper discusses the history of JLA's and the other society's pride and self-esteem, and dissolution from the first period of Showa to the postwar days.

目次

- 1 文庫協会の時代：日本文庫協会と関西文庫協会
 - .1 日本文庫協会：1892 年 3 月発足
 - .2 関西文庫協会：1900 年 2 月発足，「東壁」創刊
- 2 日本図書館協会 (JLA) 形成期：十五年戦争前まで
 - .1 JLA 誕生と政治的干渉：「松本喜一帝國図書館長」登用と拒絶騒動
 - .2 徳川資金と関東大震災：『図書館雑誌』間宮不二雄委託
 - .3 JLA 在京理事会『図書館雑誌』を奪還：「松本喜一理事長」選出
(以上既説)：本誌第 1 巻 1 号：November 2018。以下，本号)
- 3 十五年戦争期以降，終戦直後まで：日本の図書館専門団体の“矜持”の命運
 - .1 青年図書館員聯盟『圖研究』の成長：“事務派”のモラトリアム
 - .2 大政翼賛的 JLA の迷走：中央図書館長会議，読書指導
 - .3 矜持の溶解：団体規制令，雑誌休廃刊
4. まとめと展望：民主化転換，断絶と継続，戦争責任論

3 十五年戦争期以降，終戦直後まで：日本の図書館専門団体の“矜持”の命運

20 世紀初頭に誕生した日本図書館協会 (JLA) は専門職団体として纏うべき矜持を模索したが，JLA におけるその模索は空転だったと言えよう。往時の日本 (大日本帝國) は 1894 (明治 27) 年から 2 年間の日清戦争を戦い台湾を植民地とし，1904 (明治 37) 年から二か年の日露戦争を経て，1906 (明治 39) 年，アジア極東地域 (いわゆる“満洲”) に南満洲鉄道 (満鉄) を設立した。これは植民地経営機構，国策を帯びた半官半民会社で，満洲の権益に関わるに止まらずシベリア出兵，中国・関東州侵略に策動の日本帝國軍 (主に陸軍，通称“関東軍”) を支えた。社業は鉄道・交通関係に限らず，植民地・満洲のインフラをはじめ公共生活を差配する官庁のごとき役割を，第二次世界大戦終戦まで担った。

後藤新平初代総裁は「文装的武備」を標語に，文化，情報面事業をも重視し，満鉄設立の翌 1907 (明治 40) 年“調査部”を設けた。満洲開拓 (侵略) のための研究・調査を行う機関で，その調査資料の収集と満鉄社員等住民の読書に資する機能を期して図書館設置を図り，1918 (大正 7) 年に大連図書館，翌年に奉天 (現・瀋陽) 図書館を設立した。これらの図書館は現代の仕分け法では“私立図書館”“会社図書館”“専門図書館”と言えようが実質は国立図書館的“公共図書館”であり，“参考調査図書館”と“一般図書館”の機能を果たした。それぞれ設立数年後，柿沼介 (以下，柿沼) が大連図書館に，同館を経て衛藤利夫 (以下，衛藤) が奉天図書館に赴任した (共に数年後館長に昇進)。数十万の蔵書を築く。大連図書館が館報『書香』を 1924-25 年に出し，同誌名で，満鉄全図書館の館報として 1929 (昭和 4) 年 4 月復刊された (大連図書館 1924.4)。

関東軍は1928(昭和3)年、中国奉天軍閥のリーダー張作霖を暗殺(皇姑屯事件)。その3年後の1931(昭和6)年、満洲事変(柳條湖事件)を起こし、同事変を“その父・張作霖の敵討ちを謀る張学良のテロ”と嘯き軍略を進めた。だが実際は哈爾濱(ハルピン)進出を図る関東軍が、石原莞爾の策動の下に、本国で大杉榮らを殺害し服役後渡満していた甘粕正彦らが犯した爆破事件である。奉天図書館長・衛藤(後 JLA 理事長)は旧制五高(熊本)で同窓の思想家・大川周明を媒介して、この関東軍内の過激派と通じており、関東軍が設けた奉天指導部の講師(政治的指導者)の地位に就いて侵略政策の表面で動いていた(東條文規 1999.3, p.122)。衛藤は「五族協和」(日韓満蒙漢の5民族が協調して暮らす国家の成立を目指す)思想に立っていた。その“国”は「王道楽土」と称された。彼は、大川周明主宰の雑誌で「支那を食え」と発破するなど(小黒浩司 1992.3, p.259)大陸の日本図書館人中で激烈な一人だった。また満洲事変で接収した張学良府跡に、その蔵書『四庫全書』等を中心に満洲国立奉天図書館をも造った。

日本は1932(昭和7)年、国際連盟を脱退。同年、五・一五事件＝海軍系統のテロで犬養毅首相が暗殺され、1936(昭和11)年二・二六事件＝陸軍系統のテロで複数の大臣等が暗殺された。

1937(昭和12)年7月7日、盧溝橋事件が勃発。同事件は張学良の仕掛けとの見方もあり、この事件を切っ掛けに日本帝國軍隊は北京、上海へ侵軍。同年12月13日、蒋介石政府の治める首都・南京が陥落(支那事変)。この件については「大虐殺」の規模、存否を巡り議論がある^{注1)}。往時の図書館関係の保存資料に立っての確認、分析が肝要である。竹内による南京・雨花台(戦禍記憶所)見学後の感想が、悲しみを書き留めている(竹内愼 1978.9)。

原子爆弾の惨禍を世界に訴え得るのは日本人ばかりである。同時に、それと同じ強さきびしさをもって、日本が中国人民に与えた惨害を省みるべきである。

この省察に浮かぶ南京侵攻の経路上に位置する北京、天津でも日本帝國による蔵書の略取が行われており、これについても近年、研究が深められている(榎谷純一 2006.9, 岡村敬二 1991.3)。

この昭和初期、日本本土は、シベリア出兵関係の消耗(出兵7万3,000人、戦死者5000人内外)。10億円<当時>の巨額戦費、続く関東大震災(1923年)、世界大恐慌(1929年)の下に、不況、疲弊に喘いでいた。

JLAを軸に言えば、関東大震災後で『図書館雑誌』編集・出版の危機に直面、それを救った間宮不二雄(以下、問宮)を短期でその編集・刊行責任者から罷免した。この件にともなう、問宮を呼びこんだ今井貫一(以下、今井)を理事長から更迭。代わって松本喜一(以下、松本)の理事長就任と一連の騒動に至ったことは、前編、第2章で記した。“松本理事長”の選出は「日本図書館協会を暗黒時代へ進めた」大失敗の選択肢だった(小川徹[ほか] 2006.11, p.202)。

ところで1939(昭和14)年、満鉄調査部は“大調査部”策、機能集中化に向かい、そのスタッフは2000人を超えるスケールとなった(山田豪一 1977.1)。結果、大連、奉天図書館の調査図書館機能を満鉄本部に奪った。柿沼は早速1940(昭和15)年大連を去ったが衛藤は後少し満洲に止まる。

1942(昭和17)年、北京へ出張のJLA理事・中田邦造(以下、中田)が、満洲・大連航路を用いて、途上の奉天に衛藤を往復で訪ねた。衛藤は後述のように中田の誘いを受け入れ、同年、同館を辞任・帰国し、JLA理事に就任した(東條文規 1999.3, p.122-124)。

1940年代、日本軍は満洲国に続き、東南アジア・南方(ニューギニア、豪州本土)へ侵行。1941年末日米開戦(太平洋、アリューシャン列島含む)。ソ連(現・ロシア)が1941年に日本と結んだ不可侵条約(5年効力)を満期前の1945年4月に破棄して日本に宣戦布告。満洲・中国北東部、樺太、千島列島、朝鮮(北部)に侵攻した。“日本帝國”は鶴見俊輔の言う“十五年戦争”の凄惨な末期を迎えた(鶴見俊輔 1956.1)。

“十五年戦争”期、“日本帝國は、“挙國一致”、“一億玉砕”などをスローガンに、言論界に治安維持法、憲兵・特別高等警察(特高)による思想取締り・検閲等を行った。読書の自由の保障を致すべき立場にある図書館(界)は、危機感と無力感の苦渋を飲み、暗澹たる時代に晒される。

なお中国侵略時、一時、国内は一種の好景気状態(軍需景気)にあり、図書館費の増加、小規模図書館(通俗図書館・簡易図書館)の増加等を見た。だがJLAにおいては運営資金が欠乏。国家補助を文部省に訴え、その自立に揺らぎを見せた。結果、松本理事長の手蔓で1930(昭和5)年、社団法人(当時)となり(JLA 1993.12, p.525)、政府から便益を受ける御用機関へと傾斜した。さらに終戦直前の1945(昭和20)年3月、財団法人に組織替えし(JLA 1993.12, p.534-536)、形ばかりの組織の維持を図り、理事長に文部省教育局長・近藤寿治を迎え、完全に国家の末端に入った(同財団法人寄付行為にその事実を見る「第1条：本部ハ文部省構内ニオク、第4条：本会ハ〔中略〕左の事業ヲ行フ、一 政府の行フ図書館行政ニ対スル協力 二 国民読書の指導」ほか)。

ただしこの時期、専門職団体としての毅然とした活動を全うした専門集団が図書館界にあった。間宮が起ち上げた青年図書館員聯盟であり、その活動の果実は機関誌『圖研究』に所載された。

3.1 青年図書館員聯盟『圖研究』の成長：“事務派”のモラトリアム

前編(第2章)で見たように、大正末期から昭和初頭にかけてJLAは理事長に今井大阪府立図書館長を、『図書館雑誌』編集・発行担当者に間宮を任命したが、JLA東京本部はこの実行を“一時委託”だったかのように、震災処理が落ち着く1927(昭和2)年初頭、二人からこの任務を奪取した。

これに際しJLA東京本部は、事もあろうに、かつて、帝国図書館長への就任を不適當と抗議を呈した人物・松本喜一を、自らの組織の理事長に選出した。間宮を“商人”と侮って追い払い、JLAにおける支配力(理事長、機関誌編集者の地位)を東京本部に回帰させる意図と連環したものである。

松本は、JLAを専ら国策機関化せしめた張本人ともいうべき人で、住谷は松本を「日本のムッソリーニ^{注2)}」に譬え、後に館界の戦争責任者と追及した(住谷雄幸 1969.3, p.5-6)。

間宮はJLAの強引な対応を意にも介さぬかのように、1927(昭和2)年に青年図書館員聯盟(以下、青連)を大阪市に設立。自ら主宰者「書記長」となり1928(昭和3)年、機関誌『圖研究』を発刊。専門職の矜持構築を図った(「圖」は中国図書館学者・杜定友による「図書館」を表す造字)。

青連は綱領として以下の5項目を挙げている(高山正也 2016.4, p.102)。

- [1] 図書館員教養の向上
- [2] 図書館管理法準則の確立
- [3] 図書館設立経営の指導
- [4] 図書館員の社会的地位の改善

[5] 単一図書館聯盟結成の促進

ちなみに「図書館従業者の多くが曇如として伝統的象牙の塔に閉じ籠り、山積する課題に対しても一致協力して事に当たることなく袖手傍観している」と、広く理論と実務の両面からの組織的な研究の必要性を訴えた。その基底に図書館員の教養の必要性、専門職としての実力の養成を求めた。

ここで留意したいのは「単一図書館聯盟結成の促進」を謳ったことである。

JLA に反旗を翻し別組織を作ったのではない。JLA の「活動方向との対立を意識して専門職としての図書館員個人を全国的に結集」しようとしたのである (岩猿敏生 2007.1, p.208)。

青連は、大阪府立図書館との親密さを頼りに、その館長・今井を顧問に、同司書部長・中尾謙吉を初代主席理事に迎えた。また問宮が問宮商店を構えた大阪や近畿一帯の図書館員、和歌山高等商業学校司書の鈴木賢祐、神戸高等商業学校司書の鞠谷安太郎などを発起人に並べた。彼らには研究素養が既にあったが、生業における肩書は、主に“司書”であり、大図書館の館長クラスを揃えた JLA の理事会と比べ低職位だった。当時、早大仏文科出の同館新人の司書だった田島清は「ここ〔青連〕に集まっていた図書館員の多くは学歴が世間的に不利で司書にしてもらえなかった不平分子」(田島清 1975.8, p.51)と語っている。

この 1928 (昭和 3) 年 3 月大阪府立図書館は創立 25 周年を迎え、今井館長の在任記念を中心に約 160 名が集い祝典を実行した (大阪府立図書館中之島図書館 2004.2, p.127-129)。大阪府知事挨拶のあと、松本喜一が文部大臣祝辞を代読し、JLA 理事長祝辞は当人・松本に代わって京都帝国大学 (以下、京都帝大) の附属図書館長 (以下、館長) の新村出理事が代読した。

ところでこの祝典の数日まえ大騒動があった。同館の若い司書たちは、この際 25 年勤続の藤田弥太郎司書をも表彰すべきと訴え、募金を画し奉加帳を回した。発起人の筆頭に中尾謙吉司書部長の名があった。青連の主席理事をも務めていた中尾は若手からの依頼でそうしたのであろう。ところがこの一件が館長・今井の逆鱗に触れ中尾司書部長は面罵のうえ論旨免職を言い渡された。若い司書たちは“連決辞職”覚悟で今井に中尾の免職処分撤回を訴えた (田島清 1975.8, p.51-69) ^{注 4)}。この件を話題とした座談会仕立ての投稿記事が当時の『図書館雑誌』に載っている (大阪府立図書館関係者 [座談] 1928.3, p.64-65)。「藤田司書二五年勤続を称える」形をとっているが、関連で免職された中尾謙吉については触れていない。本件を細かく書き留めたのは田島清 (前出) である。ところが田島は、この被罷免者を“中谷司書部長”と表している (下線、志保田)。記憶違いでもなかろうが。ただし田島は“中谷”の子息「昇平」が事件の約 30 年後“大阪市役所の教育長、助役となった”と記し (田島清 1975.8, p.51, 69)，“中尾発見”のヒントを残した (大阪市 2018.12)。なおその約 40 年後の同館 OB たちによる＜70 周年記念座談会＞においてもこの件が話題とされた。だが、中尾の名は「N」とイニシャルである (中村祐吉 [ほか] 1975.3, p.6)。さらに 30 年を重ねた後『大阪府立図書館 中之島図書館百年』(2004.2, p.128-129) に関係記事が出る。ただこれは、75 年前の『図書館雑誌』上の座談会記事を引いたに過ぎず、“中尾”の名を明かしていない。これは同事件が大阪府立図書館史上大事件と認識する一方、実を語り難いという事情があるようで“見え消し”状に語り継がれている。結果として往時の府県立図書館長たる者の強権力 (彼らは館員の給与を決め免職する権力を有していた) を透写し、司書の専門職的活動阻害の実際を浮き彫りにしている。“中谷”(中尾謙吉) は関西大学

図書館に転職し、年収は三分の一にダウンしたという(田島清 1975.8, p.69)。ついでながら今井は1920年代初め、佐野友三郎(山口県立図書館長)の大阪市立図書館長への異動を妨げたといわれている。佐野はこのあと1920(大正9)年5月に自殺している(前編参照)。

今井はその後1935(昭和10)年まで同館館長を続けるが、在席末期の1932(昭和7)年、JLA 目録法制定委員会委員長となり「和漢図書目録法」を案出した(JLA 1932.4, p.764)。これは日本伝統の書名主記入方式に沿えて青連が主張する西洋流の著者主記入方式を併記したもので、実質は「案」であった。必然的に「主記入論争」が起きた。この議論の惹起は日本における目録議論に点火したとも言える(志保田務 2005.5, p.77-84)。青連は早々に「主記入論争ヲ終焉シタ」(青連 1932.10)と勝利宣言し、著者主記入方式に立つ『日本目録規則』(NCR)策定にかかった。それが1943年発表に至るいわゆる『日本目録規則』であり、JLA による NCR 諸版の元版(1942年版)とみなされている。ただしこの方式は後1977(昭和52)年「記述ユニット方式」に主座を譲った。

こうした青連会員について、中田は、「事務派」と揶揄した(中田 1934.1, p.3-4)。青連は図書館(の蔵書)構築の基盤技術を固めようとしていたのである。一方、中田は後述するように、読書指導運動に邁進し、この期の JLA の舵取りに挑み、館界を国策の餌食に供する、旗振り役にまわっていた。中田らの策が破綻し終戦に至り JLA は貧窮に喘ぐ。それを救ったのは青連・間宮が版權を有した『日本十進分類法』(NDC)の JLA 譲渡、その販売売上げ利益の JLA 納入である(後述)。

3.2 大政翼賛的 JLA の遁走：中央図書館長会議、読書指導

1928(昭和3)年、三・一五事件が発生した(小林多喜二, 1928.3 青空文庫)。

この事件は社会主義思想家たちの検挙で、逮捕された共産党員数千名、以外の被検挙者300名(以上概数)、被拘留者30名という。治安維持法(大正14年4月22日法律第46号)が適用されもので、さらに1941(昭和16)年、死刑罰を加え改正される。ここに言論の自由という、図書館が自己の存在礎石としている理念そのものへの弾圧が苛烈となった(JLA, 1993.12, p.237-253)。

3.2.1 図書館令の“改正”：“附帯施設論争”と中央館長会議の制度設定

図書館令(1899: 明治32年)の改正は、“日本図書館協会”への改称当時から JLA が専門職運動の中心に置き、文部省に対する重要要望事項であった。1929(昭和4)年、図書館を管轄する社会教育課を社会教育局に昇格させた文部省は、過般の図書館令改正運動に鑑みるかたちで、同令改正の草案を作成し、道府県立図書館長会議の意見を聞いた。結果、1933(昭和8)年7月1日、改正図書館令が公立図書館職員令と共に同日公布された。この年の8月16日、JLA はその事務所を文部省新庁舎内に移した(JLA 1993.12, p.765)。これは単に借室を移動したという単純な問題でない。

図書館界の大勢がこの図書館令の改正を受入れていたこの時期、石川県立図書館長であった中田は、同令第1条の下記第2項に猛反発した。

図書館ハ社会教育ニ関シ附帯施設ヲ為スコトヲ得

中田はこの第2項に怒り「図書館員の拠って立つところ」、「図書館は図書館として発達せしめよ」

との論を『図書館雑誌』28年1号(1934.1, p.3-4)及び4号(1934.4, p.90-76, 107)に投じた。中田の論調は、そのタイトルからも分かるとおり、図書館施設を目的外へ無軌道に流用することを拒絶するものであった。文部省の松尾友雄社会局成人教育課長は“社会教育は図書館本来の目的”と突っぱねた。だが中田は“ならば同条第1項(下記)だけで十分であり、第2項の「附帯施設ヲ為スコトヲ得」は不要”と反論した。

図書館ハ図書記録ノ類ヲ蒐集保存シテ公衆ノ閲覧ニ供シ其ノ教養及學術研究ニ資スルヲ以ッテ目的トス

中田は、国が進めている統合管理(団体等合併策)の流れの下に公民館の機能を図書館に押付け、教育館のような施設とする策を察知、警戒したのであろう。この改正図書館令第1条第2項の出現に危機感を抱いた中田は、翌1933(昭和8)年春の全国図書館大会で「図書館ニヨル社会教育ノ研究機関設置ニ関スル件」を提案。可決されその翌年2月JLAに關係調査委員会が設置され、中田は同委員会の主査となった。委員会は委員全員の意見を第3次にわたり『図書館雑誌』に紹介。1937年6月付けで「図書館社会教育調査報告」としてまとめた(JLA 1937.9)。同報告に対して「現代社会における公共図書館の活動の意義とそのあり方を理論的にあきらかにしたわが国最初の文書」との評価がある(裏田武夫[ほか]1968.3, p.23-24.)。この資料は、JLAとして編まれたわけで、図書館専門職団体としての矜持を表したといえるものであろう。ただし全面的に評価できるものでない。

その理由であるが、組織論一般論からいえば、組織・機関には、二つの機能があり、目的遂行機能と組織維持機能である。この理屈に照らせば、上記の調査報告書は、目的遂行機能の一推進と言える。だが、その目線が問題である、“図書館員＝教育者”(主体)とし“大衆＝被教育者(客体)”という関係に据え、図書館社会教育の教育的機能を「未だ自己教育をゆうせざる人々(大衆)への働きかけ」としており、そこに民衆教化思想、その後に中田が展開する「国民読書運動」の素地が示されている(JLA 1993.12, p.244)。つまり民衆教化という国策にすり寄ることによってJLAという組織を維持するという機能を果たそうとしたものである。また組織維持の面から言えば、図書館を他の組織に変質させまいとする意図で、当時孤塁を守ろうとしたのであろうが、少なからぬ図書館が軍需施設化する。

ところで、文部省におけるこの図書館令改正の中心は、館界を支配するための機構としての中央図書館(制度)規定の制定にあった。漠とした中間組織として在った道府県図書館長会議を、文部省をトップとする指令権をもって統括するピラミッド組織、中央図書館制度とし、国家によるJLA支配を図ったのである。附帯施設反対の中田の熱弁を喰うような深謀遠慮の礎石が敷かれていたのである。

3.2.2 中田邦造のJLAへの進出：高柳賢三による懇請

上記報告書が発表された1937年度から中田はJLA理事となる。この時期から中田はJLAの活動の中軸となり、日本の図書館界の命運を握る立場に昇って行く。中田の図書館活動歴を示しておく(中田1980.8, 梶井重雄編<年譜>p.248-266)。

1897 (明治)32 年 滋賀県出生

旧制膳所中学，旧制第八高校，京都帝大文学部哲学科卒。同大学院純正哲学専攻中退

1923 (大正 12) 年 陸軍従軍 (輜重部隊軍曹，のち予備役，1925 年同解除)

1925 (大正 14) 年 石川県主事となる (29 歳)

1927 (昭和 2) 年 石川県立図書館長事務取扱

1929 (昭和 4) 年 石川県図書館協会を設立，会長就任

1931 (昭和 6) 年 石川県立図書館長 (35 歳) この間読書運動を県下で実行

1940 (昭和 15) 年 東京帝國大学 (以下，東京帝大) 附属図書館 (以下，東京帝大図書館) 司書官，JLA 理事として読書運動を推進

1943 (昭和 18) 年 JLA 専務理事 (1945 年 3 月まで：実質最高責任者)

1944 (昭和 19) 年 東京帝大図書館を辞し，東京都立日比谷図書館長，1949 年退職まで勤続

1950-1951 (昭和 25-26) 年 IFLE = 教育指導者講習会講師，S. G. エイカーズ等と講師

1967 (昭和 42) 年 逝去，69 歳

中田は，石川県立図書館 (長) 時代，“図書群運動”と名付ける読書教育を展開，勇名を馳せた。

この中田が，警察当局に逮捕されていた事実がある。

1937 (昭和 12) 年 6 月の満洲 (大連) 開催の第 31 回全国図書館大会に参加，帰国後，7 月警察に拘束された，内務省警保局作成『特高外事月報』昭和 12 年 7 月の取り調べ記録にある (金高謙二 2013.8, p.112-113)。

種別 反軍的言動 所属団体及氏名・石川県立図書館長 中田邦造 事件の概容 7 月 10 日

左翼分子の時事懇談 会員 9 名出席に講師として出席し [次] の如き反戦的講演をなしたり。

「上海事変当時，日本の陸戦隊は生きている支那人をトラックに積んでうみに投じた。これを見ていた支那民衆は何ら憤慨することなく…(後略)」

ここにいう「上海事変」は所謂「支那事変」(1937 年侵軍) 以前の 1932 (昭和 7) 年に上海租界で日本軍が致した軍事行動を指す。この襲撃で上海東方図書館所蔵の中国重要古典が焼失され，「秦の始皇帝のそれを凌ぐ焚書」と言われた (小川徹 [ほか] 2006.11, p.203)。

上述の逮捕では不起訴だった中田だが，ここから彼は右傾化して賛政治協力に走り (金高謙二 2013.8, p.112-113)，大政翼賛会，日本出版文化協会と連帯して国民読書運動 (国民思想善導) を展開した (日本図書館文化史研究会 2017.9, p.198)。

1937-38 年度に，中田は JLA 理事となった。同時期に理事となった高柳賢三 (以下，高柳) は，次の期 1939 (昭和 14) 年度，理事長に選ばれた。松本喜一理事長時代の幕引で，JLA 事務所は高柳が館長を務める東京帝大館長室内に移された。だが高柳は JLA 内においては外様と言えた。そこで金沢の地に足を運び，公共図書館畑で活躍の中田に JLA の実務を任せてほしいと説得。了解した中田は翌 1940 (昭和 15) 年，石川県立図書館長を辞任し JLA 理事となるべく東京に居を移した。生業として東京帝大図書館に司書官の職を得た。中田は同館館長室内の JLA 事務所と，司書官室の間を頻繁に往来した。一連のことは高柳の尽力に関わるが，この事実逆は逆に JLA が個人プレーに頼ってい

た証拠とも言えよう。

3.2.3 中田邦造と“読書指導”：JLA 大政翼賛化

石井敦は、敗戦までの数年間の JLA をして「ほぼ会長，専務理事の独裁体制」だったと言う (JLA 1993.12, p.75)。中心は中田だった。中田の神髄は，上記の読書指導，読書運動という領域だった。関係事項を微かに跡付け，まず用語を簡単に定義しておく。

「読書指導」とは読書に関する指導行為で，少なくとも今日では，子どもに対し，学校などが，適切な読書への動機付けをし，それによる人格形成，社会適用能力の獲得といった効果の実現を図る教育行動とされる (日本図書館情報学会 2013.12, p.171-172)。この意味から今日「公共図書館ではほとんど使われない」用語とされる (図書館用語編集委員会編 2004.4, p.360)。当用の図書館用語辞典 (和書) 全般はこれと同様に定義している。ただしこのように限定する理由を明記したものはない。推測するに，十五年戦争期に，文部省や中田などが展開したそれ (読書指導) に紛れまいとするところに理由があると思われる。国策の「思想善導」施策，1937 (昭和 12) 年の近衛内閣の提唱で展開された「国民精神総動員運動」に連結した往時の「読書指導」と一線を引くのであろう。

本稿が扱う「読書指導」はこうした現代の用語辞典類が言及を止めている，当時の「読書指導」である。ただし，批判的に扱う。

「読書運動」については，上記二つの“辞典”を初めとして「読書の普及を目的とした運動」として戦後に展開された「母と子の 20 分間読書運動」，「PTA 母親文庫」などをあげる (JLA 2003.11, p.215-216)。この件でもいずれの用語辞典も，戦時中の「読書運動」が「読書指導」推進のための官制運動として機能し，前者同様「思想善導」，「国民精神総動員運動」に連結したことへの言及が乏しい。

本稿が扱う「読書運動」はまさに戦時型の「読書運動」である。無論，批判的に対処する。なお「思想善導」は「思想」に対するリスクの欠如を示す行動で，本質的に，「善」でありえない。

ここで中田の読書指導についてその実態を確認しておく必要を覚える。

彼は段階的読書資料の構造化「図書群」との構造化概念の提唱者だった (岩猿敏生 2007.1, p.229)。

上述した戦時の読書指導が文部省の施策として，国民の戦意高揚に用いられた時期は「1942 年度から」で，その前の「39, 40 年度はその基礎固めの時期」とされる (奥泉和久 1992.5, p.2)。

中田が石川県で読書指導運動に傾注した 1930 年代は，それまで盛んであった自由民権的な読書会等に対する JLA 松本理事長などによる“左翼的”との指弾 (松本喜一 1928.10) を見て，青年学級 (学校組織外の青年団的組織) で行なわれていた読書学級，輪読会などへの“思想善導”策が動き始めていた。中田は，対象 (図書館利用者) を三種に分け，第一種は独自に図書を活用しうるもの，第二種は活用に少々援助を必要とするもの，第三種は全く館の指導を必要とするものに分け，第二種対象には選書，推薦を通し指導し，第三種に対しては段階的読書のための“図書群”を提供，懇切に指導するとした (中田邦造 1938.1)。これは“良書普及運動”に繋がる。この当時の中田を「純粹」とかばう言があるが (岩猿敏生 2007.1, p.230)，中田は松本 JLA 理事長が「従来青年学級の寵児たる観のありました社会科学に関する図書はようやく影をひそめ自然科学がこれに代わるに至った…」 (松本喜一 1936.10) と嘯いた流れを汲んで行動したもので批判にあたる。中田は自己の読書運動を“図書群運動”と呼んでいた。なお「良書普及」とは戦時中「思想善導」に通じていた用語であり，今日では使

用が避けられ「適書」,「紹介」というあたりの語が用いられている(図書館用語編集委員会 2004.4, p.562-563)。

侵略戦争推進の国策を煽る国民精神総動員運動に乗って,中田はJLA専務理事として文部大臣諮問の「大東亜共栄圏建設ニ即応スベキ国民読書指導ノ方策如何」に応じて“国民読書”運動を展開した。驚愕の国策追従にJLAは突き進む。

中田は遂に巨大プロジェクトを企画する。満洲開拓地読書運動である。その実行機関としての財団法人満洲開拓読書協会を1943(昭和18)年11月設立(JLA 1993.12, p.97)。指導者養成のために1944(昭和19)年2月11日,富士山麓に芝富読書指導者養成所を開設した(鞆谷純一 2007.9, p.110-114)。だが僅か数か月で頓挫し,その余波で満洲開拓読書協会そのものが破綻。同年6月2日に解散した(鞆谷純一 2007.9, p.110)。

中田は1944(昭和19)年7月,東京帝國大学司書官を辞し,東京都立(この年4月「東京市」,「東京府」は「東京都」に組織変更)日比谷図書館館長に転じ,蔵書を空襲・火災から救う大規模な疎開を指揮した(金高謙二 2013.8, p.115)。中田がこの東京帝大図書館司書官からの転職について鞆谷は「[芝富事件と] なんらかの関連性があるのではないか」と推測している(鞆谷純一 2007.9, p.112)。ただ記録によれば,中田は上記事件の時を超えて1945(昭和20)年度までJLA専務理事を務め,平理事を1947(昭和22)年1月末まで続けている(JLA 1993.12, p.536, 735)。

3.2.4 衛藤利夫のJLAへの担ぎ出し:中田邦造による懇請

1940年代初頭のJLA理事長・高柳は,行政的手腕,特に文部省との交渉に手詰まりを覚えていたようである。法律学が専門であり,極東国際軍事裁判(第二次世界大戦戦犯を裁く東京裁判)で弁護人を務めるほどの力量を有したが,JLA会長職は畑違いであった。国家による圧迫で逼迫するJLAを支えるには,専務理事・中田だけでなく,その上位の専門力が必要と考えたのであろう。高柳は自分に代わる人材として衛藤利夫を擬し,その担ぎ出しを中田に委ねた。

中田は1941年9月末から10月にかけて中国華北各省の社会教育人員講習会で「新秩序建設と図書教育」の短期講習講義を行うため北京に赴いた機会を活かして衛藤を奉天に訪れ,説得に成功した。彼は帰国後「衛藤が了解」の旨を常務理事会に報告し,1942(昭和17)年1月25日付で衛藤はJLA理事を委嘱された。この選任行動は社団法人日本図書館協会定款(昭和15年10月12日変更認可)の第23条後段「其ノ他ノ理事ハ会員中より総裁之ヲ委嘱ス」の規定に拠ったと見られる。だがこれについて小黑は「不明朗な人事といわざるを得ない」と厳しい(小黑浩司 2016.4, p.254)。理事会で理事に選任された報の2日のちの1月27日,衛藤は奉天図書館を退職,東京に戻った。因に,この1941年のJLA理事名簿(JLA 1993.12, p.734)に“衛藤利夫”の記載はなく,彼が理事として公式に記されるのは1943(昭和18)年度が最初である。衛藤は,中田が企画した財団法人満洲開拓読書協会の発起人に,大政翼賛会系3人の官僚及び中田とともに名を連ねた(鞆谷純一 2007.9, p.107)。JLA内で会長(1943年度からは理事長制から会長制に変わっていた)などを差し置き発起人として衛藤の名が出たのは,彼が中田専務理事直結の立場にあったゆえ考えられる。ついでながら衛藤は文部省の「読書指導要領」作成のための会合「小諸会談」に文部官僚・有山崧(以下,有山)などともに参加し,それに関する一文を1942(昭和17)年8月に奉天の後任図書館長に郵送している(『衛藤利

夫』1980.4, p.159-163)。衛藤が本式に JLA の経営の第一線(理事長, 事務局長)に立つのはこの少しあと、終戦後である。なお衛藤は一度も「会長」の肩書を持たなかった。

3.3 矜持の溶解：団体規制令、雑誌休廃刊

1945(昭和20)年3月末 JLA では高柳会長が退いた。中田も専務理事を退き、平理事となった。

JLA は、1945(昭和20年)3月15日、寄付行為を改正し財団法人へ組織変更。ここで総裁職を廃したが、会長職は存続させ、これに岡部長景を就け(1946年度末まで)、継いで1947(昭和22)年1月29日まで安倍能成を就けた(JLA 1993.12, p.534, 536, 735)。岡部、安倍とも当職就任直前は文部大臣だった。また理事長職が復活した(JLA 1993.12, p.534)。ここに JLA が官庁機構の外郭団体との性格を露わにし、大日本教化報国会の御用機関となった。ところで上記、岡部、安倍、近藤らの役員は、「日本図書館協会歴代役員」の肖像群(JLA 1993.12 前付肖像)に漏れている。ただし同書本文内(p.735, 771)にその姓名・職名が記録されている。

岩猿はこの時期に関して次のように記している(岩猿敏生 2007.1, p.237)。

もはや読書指導どころではなく、重要な図書を米空軍の焦土作戦から守るための疎開作業に必死であった。[中略] 堅固に造られた図書館の建物は、軍事用に転用された。[中略] 図書館はもはやその活動の場を失ってしまったのである。戦災によるぼう大な蔵書と施設の焼失、図書館活動の全面的な崩壊を以て、日本近代図書館史はその幕を閉じるのである。

「館界における批判者」と褒められた青連(岩猿敏生 2007.1, p.208)は、軍国政府から“JLA と合併を強いられた。だが1943年6月さっさと解散宣言し、同年12月『圖研究』「解散記念号」を刊行した。この号で下記のように JLA 批判を露わにした。「仮名遣いは原文のまま」

我国ノ図書館ノ指導者ヲ以テ任ズル文部当局ト云イ日本図書館協会ノ幹部ト云イ、図書館本来ノ使命オ忘レ傍系的或ワ枝葉的ノコトニ大童トナリ。図書館ノ本質的進歩ニワ一向目オムケザル様ナルワ我等トシテ我図書館事業ノタメ甚ダ心痛ニ耐エナイ処デアル。

一方、『圖研究』の譲歩的廃刊で継続機会を得たにも拘わらず、『図書館雑誌』は1944(昭和19)年8月15日28巻5号をもって休刊した。その号は全4ページ。内半分の2ページを松平頼寿元総裁の追悼に充てた。しかも休刊には言及せず読者は目に入っていない。国家体制との癒着性が深刻である。

JLA は、1945年3月、「財団法人・大日本図書館協会」と名称変更し、文部省の外郭団体となった。

4 まとめと展望：民主化転換、断絶と継続、戦争責任論

終戦後、中田は日比谷図書館に在ってなおも読書指導運動を展開しようと動いたが、戦時中の国と密着形の図書館運動は終焉を迎える。中田は労働問題を因に東京図書館を早期退職し教育指導者講習会(Institute For Educational Leadership: IFEL)図書館学講習(主任:S. G. Akers)の日本人講師を読書学専門の阪本一郎、東京帝大図書館司書官の後輩・土井重義とともに務めた(JLA 1960.7,

p.64)。だが以後 JLA に強い影響を与えることもなく 1967 (昭和 42) 年 69 歳で没した。清水は中田について「激動期を大股で歩み去った人」と過去完了形で偲んだ (清水正三 1983.6)。戦中期の中田の責任を暗示したかのようである。ただ中田の暗部について、中田の後輩筋にあたる梶井重雄は言及していない (中田邦造 1980.8, p.225-245: 解説/梶井重雄)。また改訂図書館令関係で論争した個人論文 (中田邦造 1934.1, 同 1934.4) を収載していない。

図書館関係者には、兵士や教員となったごく一部の人以上は戦犯に指名されず追放にならなかった。だが裏田武夫は図書館員の戦争責任をそっと指摘した。戦後 8 年もあとのことである。そこに「ナチス張りの図書館の権威者」との記述があり「その後当人は依然として館界に活躍しておられる」などの指摘がある (裏田武夫 1953.6)。これは中田や衛藤のことを指摘したものであろう。衛藤はこの年に亡くなっているが裏田の文章はそれ以前に書かれたのであろう。衛藤にはナチ時代の社会教育学者 Walter Hofmann 等からの引用が盛んにあった (『衛藤利夫』 1980.4, p.113-143)。中田はこの時期、存命で司書講習会講師などを務めていた。

衛藤は、1947 年度 JLA 理事長・事務局長となり、財団法人を社団法人に戻した (JLA 1993.11, p.734, 771)。文部省外郭団体からの離脱であり、衛藤には「協会再建の大恩人」との評価もある (田中隆子 1983.6, p.105)。衛藤は翌 1949 (昭和 24) 年度末まで理事長を務め、1953 年 70 歳で亡くなった。

ところで東條文規は満洲にいた図書館指導者達の 3 人の戦争責任を書き留めている。その第一に衛藤利夫を挙げた。単に年代順では柿沼介が先頭に来るはずだが、真っ先に衛藤を追及した。衛藤は「真摯なる夢」を満洲に垣間見た人に違いないが、日本帝国の侵略で謳われた「五族協和」「王道楽土」といった思想で突き進んだ (東條文規 2009.4, p.243-244)。また衛藤は終戦直前、中田が大失敗した財団法人満洲開拓読書協会の発起人となっていた。

ここに、衛藤、中田に関して戦中責任にあたる面を記したが、落とせないのが松本喜一であろう。彼は終戦直前、足掛け 25 年に及ぶ帝国図書館長在任中に病死した。JLA 理事長を 10 年以上務め、理事で残りその在任中に亡くなった。住谷が、松本をして「日本のムッソリーニ^{注 2)}」に譬え、館界における戦争責任を追及したことは既に述べた (住谷雄幸 1969.3, p.5-6)。松本は JLA を国策加担に陰に陽に導いたのである。

館界には“戦争責任”の観念は希薄だった (有山崧 [ほか] 1965.8「座談会 敗戦前後の図書館界」及び福田誠 1966.1「＜敗戦前後の図書館界＞特集を読んで」)。衛藤に一般誌 (『文藝春秋』誌) 上の一言、「われわれが満洲でやってきたこと-あれが“侵略”だったのかねえ」があるのを東條が見つけている (東條文規 2009.4, p.245)。

JLA は衛藤を最高責任者として戦後再建された。彼の熱意や JLA 組織再建への努力は評価されるが、大陸進出思想の体質が元々ある。新生 JLA の指導部長となり、後に事務局長を継いだ有山崧 (後、日野市長として日野市立図書館を築いた) は、衛藤の担ぎ出しについて「誰が考えても氏は唯一の適任者だった」と記している (有山崧 1951.10, p.7)。この有山の言には、衛藤への批判を許さない頑な姿勢が覗える。思えば有山は、戦時中、文部官僚として読書運動を中田とともに実行しており、新生 JLA の初期、文部省顧問兼任で JLA の指導部長を務めたのである。JLA の“再建”が文部官僚の旗振りにより、満洲の直進者・衛藤の担ぎ出しをもって進められた事実は、古い体質の接ぎ木作業

に譬え得るかも知れない。

その後、有山は衛藤が兼任していた事務局長の席に就き、JLA 会長に、国立国会図書館の金森徳次郎館長を、理事長に中井正一副館長を担ぎ組織固めをした。そして 1950 (昭和 25) 年「図書館法」成立後、1959 (昭和 29) 年に「図書館の自由に関する宣言」を実現し、1963 (昭和 38) 年に『中小都市における公共図書館の運営』(中小レポート) を編集・刊行せしめた。さらに都下日野市市長に就任して日本図書館史に名高い日野市立図書館を建設。同館の活動をモデルとして 1965 (昭和 40) 年『市民の図書館』が発行された。同書及び「中小レポート」は戦後日本館界の古典となった。以上は有山に繋がる功績と言えよう。しかし批判点は実は前述の域に止まらない。ただ今般は深耕できなかった。

青連は戦後に日本図書館研究会 (以下、日図研) として 1946 年復活した。1950 年に成立した図書館学会 (のち、日本図書館情報学会) との違いは、日図研が青連の設立趣旨を受け継いだ現場と図書館研究の連携の強さである。また 1955 年結成の図書館問題研究会 (図問研) との相違は、日図研が研究に重心をおき、前者が図書館運動を主眼としている点である。JLA との異なりは、日図研が研究で、国家中央との間に距離をおき独立採算している点である。青連の時期も間宮の資金に頼っていない。青連の後継・日図研は経常全経費を会費で賄っている。奨励賞制度 (年度ごと 10 万円授与) が有り、そのための寄金を外部に諮ろうとした事跡はある。ただし個人寄付に限定され、同賞用に 1000 万円を超える基金を蓄えるに至っている。機関誌『図書館界』は稀に合併号を出したが季刊ペースを守っている。日図研系の当事者の財務面の強靱さは、これにとどまらなかった。

JLA が職員の給与や旅費の支弁にさえ事欠いた時期に、間宮や日図研は救いの手を差し伸べていた。間宮は日本十進分類法 (NDC) の版權を JLA に無償提供した。またこの NDC (新訂 6 版) の出版販売 (1950 年) に際して、日図研 (理事長・仙田正雄) は当時としては大金の 65 万円を JLA に前金融通した (青木一良 1977.3)。これは大丸百貨店や KK 丸善大阪支店がモデルライブラリーを開き、資料販売を行うにつき、支度のための資金として提供された。この件で当時、関西を駆け廻った JLA 職員の青木一良 (のち、新津市立図書館長) は、長時間の帰京列車上 60 円しか所持金がなくアンパン一つで耐え JLA に戻りついた。だがそこから調布市への家への交通費が潰え、JLA 事務所に居あわせた理事・武田虎之助から 80 円借りたという。帰った家には、支払い期日がとくに過ぎた給料が届いていなかった。これほどの惨状である (青木一良 1977.3)。なお衛藤は交通費だけで月 1 回出勤し、有山に至っては無給の上、逆に実家 (旧・日野宿<後、1893 年：日野町、1963 年：日野市>在の豪農、名主) から新紙幣への切替限度額を超え交換不能状態の旧札を持ち出し JLA 名義で換金、寄付した (当時の 10 万円と伝えられる)。これが重しとなつてか、有山は日野市長就任 (1965 年) 後も JLA 事務局長の地位を続けた (1966 年 3 月末まで)。

衛藤は戦後、民主主義教育に 180 度転換したように見える。だが田中隆子は、衛藤の“民主的施策”は「米国の占領政策と、直接の担当者であったキーニー氏の指導による」と看破し、「180 度転換したというだけでは片づけられない。(中略) [彼の評価は] 今後の研究にまつべきである」としている (田中隆子 1983.6, p.111-112)。

本稿は、裏田や住谷が試みたような戦争責任追及を目的とするものではない。だが過去の専門職団体の行動を「時局下では、誰が考えてもあれで仕方なかった」と見過ごしてはならないと考え、再考した一編である。それは、戦後以後、今日の事項に関しても冷静に検討し、批判を遅滞させてはなら

ないと自ら心する，その一如としたところの小文でもある。

終戦直後，堺市立図書館長（1930 年代に大阪府立図書館から転出していた）の田島清は昭和天皇の“玉音放送”に聞いて社会的責任を痛感し退職を決意し，河盛安之助堺市長（当時）に辞任を申し出た。役職の立場において堺市の鍛錬部長なる地位に就き，戦場へ若者を送り出していたからである（田島清 1975.8, p.217）。田島はときに 40 代半ばだったが，堺市を辞め親戚を頼り会社員となる。同族会社ゆえ重役にもなったが，のち堺市議会図書室に再雇用扱いで勤務している。

「あの“あやまち”を二度くりかえしてはならない」（住谷雄幸 1966.2, p.58）。

日本における図書館専門職の制度，矜持について，戦後の歩みの緩さを思うなか，少々振り返った。日本帝国の植民地に対する戦中行動についての私の検討は，地域的に言及しえていないところがある。その言及と戦後日本の図書館専門職団体の活動についての分析に次の機会が許され，実行できることを望んでいる。

引用文献

著者から配列：ABC を先に五十音順。次に年月順。サイト最終参照は全て 2019 年 3 月 1 日。

ページに関し「○○ p.」と記した場合は対象資料の総ページを表し，該当部のみ記した場合は「p. ○○」とした。後者においては総ページをも併記するのが正道であるが，括弧類と隣接する句読点の省略と共に，軽量化目的で処理した。頁数に関するこの便法は，本文中にも用いている。

A・B・C 合記 1928.3 「隠れたる礎石の功労者：創立以来二五年の恪勤者 大阪府立図書館司書 藤田彌太郎君」『図書館雑誌』22(3) p.64-65.

JLA 1932.4 「和漢書目録法」『図書館雑誌』26(4) p.103-112.

JLA 1937.9 「図書館社会教育調査報告」『図書館雑誌』31(9)(裏田 [ほか] 1968.3, p.453-所載)

JLA 1951.10 『日本図書館協会六十年略譜：1892-1951』日本図書館協会, 61p.(全体が 61p.)

JLA 1960.7 『図書館ハンドブック』増訂版 [第 3 版相当] 日本図書館協会, p.64(所載ページ)

JLA 1993.12 『近代日本図書館の歩み，本編；日本図書館協会創立百年記念』日本図書館協会, 20, 818p.

JLA 2003.12 『図書館用語集』3 訂版，日本図書館協会, 366p.

青木一良 1977.3 「図書館協会戦後再出発の思い出」『図書館評論』（特集 戦後公共図書館を考える；1）p.51-62.

有山崧 1951.10 「戦後の六年間」『日本図書館協会六十年略譜：1892-1951』 p.7-15

有山崧 [ほか] 1966.8 「座談会 館界の敗戦前後」『図書館雑誌』 59(8) p.310-319

有山崧 1970.3 『有山崧著作集』 1-3 日本図書館協会, 3 冊, 第 2 巻, p.20-36)

石井敦 1972.2 『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会, 355p.

石山洋 2015.3 『源流から辿る近代図書館；日本図書館史話』日外アソシエーツ, 264p.

岩猿敏生 1993.10 『『図研究』と『図書館雑誌』』『図書館界』45(4) p.344-351

岩猿敏生 2007.1 『日本図書館史概説』日外アソシエーツ, 248p.

岩猿敏生 2018.3 『日本図書館学の奔流；岩猿敏生著作集』日本図書館研究会, 362p.

- 裏田武夫 1953.6 「図書館員の立場」『図書館雑誌』47(6) p.1-6.
- 裏田武夫, 小川剛編 1968.3 『図書館法成立史資料』, 日本図書館協会, 473, 18p.
- 『衛藤利夫』1980.4, 丸山泰通, 田中隆子編 (個人別図書館論選集) 日本図書館協会, 287p.
- 同書における田中隆子の「文遡閣」に関する解説 (p.267) に対して「柳條湖で〔張作良の関わる〕満州事変と張作霖爆殺の皇姑屯事件をごちゃ混ぜ [にした]」との批判あり (くろこ・つねお参照)
- 大阪市 2018.12 「歴代市長・副市長 (助役)」<http://www.city.osaka.lg.jp/seisakukikaku-shitsu/page/0000062445.html>
- 大阪府立図書館中之島図書館 2004.2 『中之島百年：大阪府立図書館の歩み』同館, 385, 90p.
- 岡村敬二 1990.3 「満鉄図書館業務研究会の歴史」『大阪府立図書館紀要』26, p.8-25.
- 岡村敬二 1991.3 「戦時下中国の接收資料について」『大阪府立図書館紀要』27, p.19-48.
- 岡村敬二 1994.3 「満洲国立奉天図書館の歴史」『大阪府立図書館紀要』30, p.11-41.
- 岡村敬二 1994.12 『遺された蔵書：満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』阿吽社, 304, 25p.
- 岡村敬二 1995.5 「満洲国で書物を司る」(転換期における図書館の課題と歴史：石井敦先生古稀記念論集) 緑陰書房, p.197-208.
- 小川徹, 山口源治郎 2003.8 『図書館史 近代日本編』(新編 図書館学教育史料集成；7) 教育史料出版会, 230p.
- 小川徹, 奥泉和久, 小黒浩司 2006.11 『公共図書館サービス・運動の歴史』1, 日本図書館協会, 266p.
- 奥泉和久 1992.5 「図書館における〈読書指導〉の導入について：1935-1945」『図書館界』44(1) p.2-16.
- 奥泉和久 1994.5 「戦時下における〈読書指導〉の展開」『図書館界』46(1) p.2-21.
- 小黒浩司 1992.1 「衛藤利夫：植民地図書館人の軌跡 (1)」『図書館界』43(5) p.202-209.
- 小黒浩司 1992.3 「衛藤利夫：植民地図書館人の軌跡 (2)」『図書館界』43(6) p.258-272.
- 小黒浩司 1995.5 「満鉄図書館協力網の形成」(転換期における図書館の課題と歴史：石井敦先生古稀記念論集) 緑陰書房, p.183-196.
- 小谷誠一郎 1941.12 「図書館雑誌沿革概史」『図書館雑誌』35(12) p.29-38.
- 金高謙二 2013.8 『疎開した四〇万冊の図書』幻戯書房, 277p.
- 加藤一夫 1996.5 「旧植民地図書館活動の研究をめぐって」(特集・図書館人が植民地でやったこと)『ず・ぼん』③, p.98-123 [同書・目次では“加藤一規”と誤記されている]
- 河井弘志 1987.3 「ドイツの図書室運動 (Bücherhallenbewegung) の思想：アメリカ・リベラリズムと教育主義の論争：[日本図書館学会] 月例研究会 (1986 年 9 月) 発表要旨」『図書館学会年報』33(1) p.90-91 (衛藤利夫による引用が多い Walter Hofmann に関する論評がある)
- 河田いこひ 1996.5 「植民地図書館の三つのエピソード」(特集・図書館人が植民地でやったこと)『ず・ぼん』③, p.12-19.
- くろこ・つねお 1997.10 「植民地満洲・淪落一四年：その研究の中での図書館」『ず・ぼん』④, p.98-123.

- 小林多喜二 『一九二八年三月十五日』 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000156/files/49394_33663.html
- 志保田務 2005.5 『日本における図書館目録法の標準化と目録理論の発展に関する研究』 学芸図書, 238p.
- 志保田務 2005.6 「間宮不二雄と『図書館雑誌』, 『圖研究』」 『桃山学院大学経済経営論集』 45(4) p.1-17.
- 清水正三 1983.6 「激動期を大股で歩み去った人 中田邦造」 『図書館を育てた人々 日本編 I』 日本図書館協会, p.156-162.
- 鈴木賢祐 1928.5 「図書館業界の志士 [間宮不二雄]」 『図書館雑誌』 22(5) p.115-116.
- 〔ず・ぼん編集部〕 1996.5 「植民地図書館関係略年表」 (特集・図書館人が植民地でやったこと) 『ず・ぼん』 ③, p.40-41.
- 住谷雄幸 1966.2 「あの“あやまち”を二度くりかえしてはならない」 『図書館雑誌』 60(2) p.58-59.
- 住谷雄幸 1969.3 「国立図書館の歩み：図書館の自由は守られてきたか」 <図書館の百年：2> 『現代の図書館』 7(1) p.1-9. *注 2) 参照.
- 青連 (青年図書館員聯盟) 1928.1 『圖研究』 第 1 卷 (1-4 号 製本版. 索引付き) 間宮商店.
- 青連 (青年図書館員聯盟) 1932.10 「主記入論争ヲ終焉シタ」 『圖研究』 V-3, p.436-437.
- 大連図書館 1924.4- 『書香』 第 1 号-158 号 (1944 : 昭和 19 年 12 月) (最終確認 : 2019 年 2 月 3 日) (<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R3000000001-I000000094699-00>)
- 高山正也 2016.4 『歴史に見る日本の図書館』：知的精華の受容と伝承』 勁草書房, 221, 25p.
- 竹内愼 1978.9 「中国の公共図書館」 <全国図書館職員友好の翼訪中団・報告 1978.6.3-6.19> 『中国研究月報』 367, p. 15-20.
- 竹林熊彦 1943.6 『日本文庫史』 大雅堂 (復刻, 日本図書館協会, 1988) 436, 7p.
- 田島清 1975.8 『回想のなかの図書館：中之島から宿院へ』 広文堂, 220p. *注 4) 参照.
- 田中隆子 1983.6 「協会再建の大恩人 衛藤利夫」 『図書館を育てた人々 日本編 I』 日本図書館協会, p.105-113.
- 鶴見俊輔 1956.1 「知識人の戦争責任」 『中央公論』 71(1) p.57.
- 寺田光孝 2012.3 「図書館員教習所から 90 年を振り返って」 (筑波大学大学院図書館情報メディア研究科 [ほか編] 『<図書館学校>創設 90 周年記念事業報告書』 61p.), 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科, p.12-21.
- 東條文規 1996.5 「植民地での全国図書館大会」 (特集・図書館人が植民地でやったこと) 『ず・ぼん』 ③, p.4-10.
- 東條文規 1996.5 「図書館人の戦争責任意識」 (特集・図書館人が植民地でやったこと) 『ず・ぼん』 ③, p.20-31.
- 東條文規 1999.3 『図書館の近代；私論・図書館はこうして大きくなった』 ポット出版, 303p.
- 東條文規 2005.5 「日本の近代化と図書館」 (加藤一夫 [ほか] 『日本の植民地図書館；アジアにおける日本近代図書館史』^{注 3)} 社会評論社, p.17-57.
- 東條文規 2006.1 『図書館の政治学』 青弓社, 230p.

- 東條文規 2009.4 『図書館という軌跡』ポット出版, 303p. [特に「図書館と戦争」第一部：図書館をめぐる 17 の論考：“図書館人の戦争責任意識”].
- 図書館用語編集委員会 2004.4 『最新 図書館用語大辞典』柏書房, 643p.
- 梶谷純一 2006.19 「日中戦争下・北京における抗日図書館の接収：中華人民国臣民会の活動を中心に」『図書館界』57(5) p.312-321.
- 梶谷純一 2007.9 「満洲開拓地読書運動：中田邦造を中心に」『図書館文化史研究』No.23, p.97-119.
- 中田邦造 1934.1 「図書館員の拠ってたつところ」『図書館雑誌』28(1) p.3.
- 中田邦造 1934.4 「図書館は図書館として発達せしめよ」『図書館雑誌』28(4) p.90-76, 107.
- 中田邦造 1934.8 「図書館社会教育の意義目的並びにその範囲に属すべき事業の種類」『図書館雑誌』28(8)(『中田邦造』1980.8 梶井重雄編＜個人別図書館論選集＞日本図書館協会, p.73-86 に収録)
- 中田邦造 1938.1 「図書館の対象学について」『園研究』XI-(1980.8『中田邦造』梶井重雄編(個人別図書館論選集) 日本図書館協会, p.87-108 に収録)
- 『中田邦造』1980.8, (個人別図書館論選集) 梶井重雄編, 日本図書館協会, 269p.
- 中村祐吉 [ほか] 1975.3 「大阪府立中之島図書館創立 70 周年記念座談会」『大阪府立中之島図書館紀要』11, p.2-15.
- 日図研京都地区研究グループ, 1977.5 「青年図書館員聯盟の運動」『図書館界』29(1) p.6-10, 28.
- 日本図書館協会 → JLA
- 日本図書館情報学会 2013.12 『図書館情報学用語辞典』第 4 版, 285p.
- 日本図書館文化史研究会 2017.9 『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 440p.
- 福田誠 1966.1 「＜敗戦前後の図書館＞特集を読んで」『図書館雑誌』60(1) p.4-5.
- 藤倉恵一 2018.8 『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程：1928-1949』樹村房, p.119 (コラム 3：衛藤利夫へのリスペクト [間宮不二雄に於ける])
- 樋口龍太郎 1986.5 『日本図書館協会五十年史事績年表』日本図書館協会, 55p. [日本図書館協会百年史・資料・第 2 輯；1941 年元編 156p.(日本図書館協会百年史・資料・第 4 輯；1941 年)を組み換え発行]
- 松尾友雄 1934.4 「図書館令第一條第二項について」『図書館雑誌』29(4) p.97-104.
- 松本喜一 1928.6 「就任の辞」『図書館雑誌』22(6) p.142-143.
- 松本喜一 1928.10 「読書週間に臨みて」『図書館雑誌』22(10) p.223.
- 松本喜一 1936.10 「最近の読書傾向を語る」『図書館雑誌』30(12) p.317.
- 松本剛 1993.5 『略奪した文化：戦争と図書』岩波書店, 303p.
- 間宮不二雄 1926.11 「図書館協会編纂 図書館雑誌の発行を引受けるに就いて；附『園』誌一時休刊の申譯」『図書館雑誌』84 号, [挿み込み]
- 間宮不二雄 1928.5 「本誌の編輯を辞するに臨みて」(『図書館雑誌』22(5) p.104.
- 山田豪一 1977.9 『満鉄調査部：栄光と挫折の四十年』(日経新書) 日本経済新聞社, 188p.

*注

注 1) 東中野修道，藤岡信勝『＜ザ・レイプ・オブ・南京＞の研究：中国における「情報戦」の手口と戦略』祥伝社，1998.9，283p. は「南京大殺戮」を“虚報”であるとする。同書「第 4 章「情報戦」というもう一つの戦争」p.222-269 で，柏書房による『The Rape of Nanking : the forgotten holocaust of World War II / Iris Chang』(Basic Book Co. 1997) の日本での翻訳が中止されたと記している。この「中止」は柏書房の自発的行動か否か真偽確認できないが，出版の自由への牽制，少なくとも自主規制にあたろう。もっとも関係原書の邦訳は，2007 年 12 月，同時代社という出版社から実行，刊行されている。下記にその書誌事項等を示しておく。

チャン，アイリス『ザ・レイプ・オブ・南京：第二次大戦の忘れられたホロコースト』巫召鴻訳，同時代社，2007.12，274p. 索引 76p.

極東軍事法廷の専門家による指摘として非戦闘員 26 万人の殺戮，別の専門家の指摘として 35 万人を超える殺戮があったと伝えている (同書 p.10)。

注 2) ムッソリーニとは Benito Amilcare Andrea Mussolini(イタリア) のこと。彼はミラノの「ファッシ」を 1921 年ファシスト党と改組した。翌年イタリア王国首相となり，エチオピア，スペインに侵攻，日独伊三国同盟を結び，英米仏を軸とする連合軍と第 2 次世界大戦を行った。だが 1948 年 7 月失権，幽閉された。イタリア王国は同年 9 月連合軍と休戦協定を結び，逆にドイツに宣戦布告した。ところがムッソリーニはドイツ軍によって同月救出され“イタリア社会共和国首相”を名乗った。だがドイツ軍の傀儡に過ぎずパルチザンの手で捕まり人民裁判の後，死刑宣告即銃殺され街頭に吊るされた。1945 年 4 月 28 日，ドイツ，ヒットラー自殺の 2 日前である。結果，イタリアは連合国側に立ち日本のような戦犯国家扱いを受けなかった。そしてイタリアは王制を廃止した。

ムッソリーニの名は，絶対的 (長期暴虐) 独裁者の代名詞として戦後期中心に多用された。

注 3) 加藤一夫 [ほか] 2005.5『日本の植民地図書館；アジアにおける日本近代図書館史』社会評論社，404p. 章建：

第 1 章「日本の近代化と図書館」(本稿での参照は，“日本図書館協会と松本喜一” p.49-55，“思想善導運動と図書館” p.55-56)

第 2 章「内国植民地・樺太の図書館」(“北海道の図書館”，“沖縄の図書館”，“樺太の図書館” p.57-74)

第 3 章「台湾の図書館」(p.75-111)

第 4 章「満洲の図書館」(“満鉄”，“満鉄調査部”，“満鉄の図書館”，“大連図書館”，“奉天図書館”，“哈爾濱図書館” p.113-176 を参照)

第 5 章「朝鮮の図書館」(“植民地図書館と図書館界” p.234-236 を参照)

第 6 章「植民地中国の図書館」(“「満洲国」と中国占領地域の図書館” p.237-238 “満洲国立奉天図書館” p.238-244 を参照)

第 7 章「南方地域の図書館」(p.275-310，特に“日本軍のシンガポール進攻”，“図書・研究資

料の等の略奪と返還問題”を参照)

第8章「戦争と図書館界」(p.311-243, 特に“国民総動員運動と図書館”を参照)

「あとがき」

「日本の旧植民地図書館年表」(p.350-367)

注4) 田島清 1975.8『回想のなかの図書館：中之島から宿院へ』広文堂，220p.

同書から一部抜粋する。p.187：書庫に防火壁を作った。p.191：書庫は焼け残った。p.200-201：[ポツダム宣言受諾の天皇のラジオ放送を聞き] 落ち着いてみると，いまや一切がご破算になり，すべてが一変していることが，切実にわかってきた。これまでなんのために必死に努力奮闘してきたかがわからなくなった。この先どう生きていくべきかを私は考えていなかった。しかしこれまで通り歯車の一つでありつづけるべきではないと考えた。[40代半ばの年齢だった。]